

# 蘇芳集

日向水

青山

丈

六月の始めパスタに口汚す  
紫陽花や袖すり合ふといふことの  
紫陽花を見た人達と駅へ行く  
瑕一つ無いところより枇杷を剥く  
雨の日は朝から目高見てをりぬ  
朝顔を咲かせ体操してゐたり  
家に居るだけでバケツの日向水

湧水

清水裕子

湧水に砂の踊れる立夏かな  
四阿の四隅に柱朝ぐもり  
竹林を抜け来たる風薔薇にきて  
人憶ふ薔薇に重さのありにけり  
大方の人は無口に薔薇を見る  
一心に色を選びて薔薇描く子  
もの考へてをり滴りを聞きつ

みどりの夜

下平直子

木下闇抜け来て青き水明かり  
祝事の明日の服選るみどりの夜  
手習ひの夫のピアノも青葉の夜  
万緑や音たてて飲む山の水  
束の間の緑雨に森の匂ひけり  
老鶯のひと声田水さざ波す  
夏落葉踏み人の輪に遠くゐる

月光

富田正吉

青芭蕉

別府

優

紅椿卷尺が来る人が来る  
椿には椿の色がありにけり  
月光にかしこまりたる椿かな  
卒然の風に椿も嘆くかな(倅渡邊彌郎さん)  
べらぼうに落花して来る椿かな  
くちびるを出づる椿といふ言葉  
塵を焼くけむりが椿包むなり

髪切虫

野路斉子

光の数

前田陶代子

梢高くここよここよと巢立鳥  
こんな日もいま咲きし薔薇いま剪つて  
さくらんぼどの皿も数みな同じ  
駆けて駆けて母に食べさせたき氷菓  
夕立に濡れて父親似なること  
けふ締切のやうな髪切虫の声  
遠き日の遠山に似て夏の森

あめんぼの光の数を算へきれず  
ひるがへる葉裏の白き芒種かな  
青蔦の風のなかなる飢すこし  
六月の滝音ひたと歩を重ね  
石橋のわづかを渡り万緑裡  
万緑といふ冥さありけり深入りす  
考へる人の横顔とは涼し

ばら 峰岸 よし子

朱を刷きて魚さかのぼる立夏かな  
落日の少しいびつに麦熟るる  
田水張り夜はさざ波の月と星  
書き出しのインクの青さ新樹の夜  
薔薇の香の雨に消えゆく多佳子の忌  
皮脱ぎし竹に真青の雨滴かな  
ばらの棘きれいに削ぎて母へ供花

どの木にも 宮尾 直美

どの木にも海の風吹く聖五月  
聞き役に徹して二つ草の餅  
石鎚の風の放てる夏の蝶  
ちちははを憶へば暮るる昭和の日  
話したきことありつつじ燃えてをり  
紫陽花の生れしばかりの青さかな  
台所俳句を是とし小夏剥く

日にち薬 八木下 末黒

餌を啜ふ親鳥せはし巢箱かな  
昼蛙寝るが薬と傷癒す  
手術後の日にち薬や蚊喰鳥  
夏掛や寝ころんでをり手術後  
養生のしづかな歩み竹落葉  
薔あまた泰山木の空窪む  
休日の背中よろこぶ籠枕

誰 何 吉田 幸敏

虻若し吾への誰何のなかなかに  
百合の木の花咲いてゐる鳴つてゐる  
芝青む東京に空ある限り  
そびらより父の手が出て菊を挿す  
不作とて小分けで貰ふ甘藷苗  
烏賊釣火横一線をなせりけり  
鶏鳴のふつと吹き消す烏賊釣火